

5節 地域の科学技術拠点校としての発信・普及の充実

東桜サイエンスラボ

(1) 仮説

近隣の小・中学生や地域の方々を対象に実験・科学教室を行う。講師は主に本校の教員で行うが、中学生及び高校生がティーチングアシスタント（TA）としてサポートを行う。生徒が教える側に立つことで自身の科学的知識を再確認するとともに、伝え表現する技術の習得を目指す。地域の方々を対象に交流することにより、地域の科学技術教育の拠点校として研究成果の還元・普及を行い、科学に対する面白さを伝えながら科学教育を推進するとともに、生徒たちが地域の活動に参画する契機とする。

(2) 実施概要

① 日時 平成29年8月5日（土）

② 場所 本校（物理地学実験室、化学実験室、生物実験室）および白水川

③ 参加者

自然科学部員（中学生14名、高校生13名）、高校3年次生有志2名

地域の小学生親子21組50名程度

(3) 実施内容

午前2コース、午後2コースの計4コースでそれぞれ実験・科学教室を行った。講座は、本校教員が講師となり全体指導を行うものの、参加者が実際に活動する場面になると、参加者1組に対してTA1人が担当となり、TA主導による活動となった。TAには、事前に予備実験を行わせていたため、概ねスムーズに参加者を援助することができた。

(4) 評価

一般参加者の事後アンケート結果は、「おもしろかった」「またぜひ参加したい」がほぼ100%であり、地域の拠点校としての役割を果たしたと考えられる。TAについては、事前アンケートでは、「人に教えること」に対して56%の生徒が苦手意識を持っており、消極的な姿勢で本事業に臨んだことが伺えたが、事後アンケートでは、「おもしろかった」「まあまあおもしろかった」合わせて100%、「来年度も参加したい」「内容によって参加したい」合わせて96%と、前向きな姿勢に変容を遂げた。参加者との触れ合いを通して、コミュニケーションに対する自信を感じさせる感想が目立った。

活動の様子

